

論文審査の結果の要旨

申請者氏名 白井 重範

本論文は、近代中国における著名な作家、評論家である茅盾（筆名、本名沈雁冰）について、その小説家としての出発と形成、発展を、前期作品の『蝕』3部作から長編『子夜』（真夜中）までのテキスト分析と時代背景などを通して明らかにしようとしたものである。論文は序論と『子夜』を論じた終章を除いて9章からなり、第1章から第7章までは『蝕』を中心に、中国国民革命の挫折を経験した茅盾が、創作を通して、自己省察を行い、世界観を再構成しようとした結果、作家茅盾が誕生した過程が詳細に語られている。第8章から終章では、そこに形成された作家精神が、さらにどのように発展していったかについて、現実に対する茅盾の姿勢を問題にしなが、20世紀20年代末に行われた革命文学論戦において茅盾と銭杏邨との興味深い差違がどのように表れたのか、その作家精神が30年代初頭の長編『子夜』にどのように反映されていったのかを論じている。以下、少し詳細に内容を概括しながら、評価を記述しておくこととしたい。

茅盾は、中国共産党の創立以来の黨員として、社会運動に携わっていたが、それとともに、中国近代文学創成期において、編集者、翻訳者、評論家として、中国近代文学の礎を築いたひとりであった。また1925年にはボグダーノフの文芸理論をなぞる形で、無産階級革命文学に関する中国嚆矢とも言える評論を発表しており、左翼文芸理論家としても知られる存在であった。その彼が、1927年の北伐、国民革命の過程で、蒋介石のクーデタさらには、武漢国民政府の崩壊という挫折に出会い、共産党の武装蜂起に参加せず、大金を持ち出したまま戦線を離脱し、一時日本に亡命、そのため共産黨員の資格は死後党籍が回復されるまで取り消されたままとなった。その後、1930年代には再び、左翼作家、評論家として活躍するようになるのだが、本論文はその間の茅盾の内面的苦悩と省察を、短篇長編をあわせた小説から分析しようとする、画期的なものとなっている。

分析は『蝕』3部作の『幻滅』『動揺』『追求』の3部を順に追う形で、茅盾の作家精神がいかにか形成されていったかを述べる。『幻滅』は、茅盾が国民革命挫折前から、ある程度準備していた作品で、ここでは主人公が、社会変動に直面し、恋愛や革命に複雑な対応を示しながら成長する物語になっているとする。『動揺』は、当時の国民党と共産党との政策の差違を背景に、時代に翻弄される人々と対立による生々しい現実を描いているとする。この描写は、茅盾が『漢口民国日報』編集長時代に収集した記事情報、とりわけ「五二八虐殺事件」にもとづいていることを詳細に分析し、そのことによって作品にリアリティと緊迫感を与えていると指摘した。『追求』においては、かつての自己の世界認識の不十分さを確認し、それを自嘲しつつ、新たに時代の理解へと立ち向かう作者の姿が描かれたとする。ここで茅盾が、以前に研究していた北欧神話に拠り所をえたことがとくに強調されていると言えよう。茅盾は国民革命の失敗を、北欧神話の終末論的なラグナロクに例え、太

陽神の復活と「現在」に奮闘する女神ヴェルダンディの精神を我がものとして、挫折の体験を、一時的なものとして相対化することに成功したとする。

こうして、精神的危機を乗り越え、作家として新たな世界認識を得た茅盾は、当時革命文学を唱えていた太陽社、創造者たちのグループと衝突することとなった。その革命文学派の文芸理論家であった銭杏邨は、日本のプロレタリア文学とくに蔵原惟人の影響を受けて、かつて無産階級文学を紹介していたはずの茅盾の新たな評論や小説に違和感を覚え、その変化を激しく批判することとなる。この論争を通して、茅盾は身を以て体得した作家精神をはっきり自覚し、自らの認識を鍛えることとなった。

論文の最後では、近代中国最初の長編小説として名高い『子夜』を論じて、全面的なテクスト分析ではないものの、既述した作家精神によってこそ初めて成立した作品だと指摘している。ここではその精神によって、現実を見すえつつ、翻弄されながらも現在に奮闘する、民族ブルジョアジーを含めた諸階級の形象を生き生きと描きえたとする。そして北欧神話を下敷きにしつつ、ラグナロクに向かって突き進む時代の流れに対しては、結局は悲劇を生みだすしかないこと、その悲劇を乗り越えた先にしか将来はないという構成が、結果的に激動のさなかにあつた中国において、ある種のリアリティをもたらし、典型的なリアリズムの作家という規定がなされるようになったとする。国民革命の挫折を経た、作家精神の働きによって、20世紀前半における茅盾という作家の独自性につながつたと分析したのである。なお本論においては、人民共和国内成立後、茅盾が文芸政策の中核的存在として、いわば文芸官僚として手腕をふるった点については、この作家精神は有効ではなかったことを暗示して、作家精神の機能を限定していることは付け加えておきたい。

本論文の特徴は、近代中国文学の典型的リアリズム作家といわれる茅盾が、自らの世界観、歴史観を検討することを通して、作家として形成されたこと。さらに創作を通して、自らを省察、対象化し、それによって、当時の現実としての中国を認識する位置を勝ち得たことを説得的に分析していることである。とくに前半では、いままで詳細には分析されていなかった『蝕』3部作の成り立ちを、当時の資料をもとに背景を含めて分析し直し、それを茅盾という作家の誕生に結びつけたこと。国民革命の挫折という体験や戦線の離脱と創作とを関係づけたことに大きな収穫が認められる。後半では、『蝕』3部作創作において、大きな作用をもたらした北欧神話の女神ヴェルダンディを手がかりに、現実を認識する作家の発展を跡づけている。ここで強調するに値するのは、銭杏邨の批判と茅盾のそれに対する応酬について、新たな視点から解明したことであり、革命文学論戦の研究においても、おおきな成果を残したこと。またリアリズム作家といわれている茅盾の長編『子夜』について、それがマルクス主義的歴史段階論よりも、北欧神話における世界の壊滅という悲劇のイメージに裏打ちされたことによって、かえってリアリティをもたらしたという、新たな解釈を提示したことである。前半と後半におけるこれらの特徴は、近代中国文学研究における貴重な業績であるばかりでなく、激動にあつた近代中国の知識人の精神的歷程を明らかにするものとして、より広い分野から参照されるべき成果であると思われる。

審査委員会においては、もとよりいくつか論文の不足する点も指摘された。例えば茅盾が『蝕』などの作品において、恋愛や女性の形象を好んで描いている点をどう捉えるか、また論者が指摘する現在に固執するヴェルダンディ精神とは、どこまで茅盾の精神的拠り所になり得たか、表面的な比喻でなく、世界認識として精神的深奥にまで食い込んでいたと証明できるのか、はっきり確証ができていない。またそうした精神を論者は作家としての創作に限定し切り離しているが、人民共和国においては、創作を放棄し文芸官僚として生きた茅盾とどう関連づけるのか、などの疑問点が指摘された。さらにマルクス主義への回帰という視点から、30年代以降の茅盾を見直す可能性もありうるだろうことも提示されている。これらについて、確かに論文の欠点となる一面ではあるが、論文の価値そのものを損なう点ではないこと、一部は今後の課題として論者の研究の展開に期待すべきことであると思われた。従って本審査委員会は、本論文の既述の成果に対して高い評価を与えうると判断し、全員一致によって、博士（学術）の学位にふさわしい論文と認定する。